

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月12日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500474

研究課題名（和文）統合失調症を有する人と家族のセルフスティグマの関連性の分析

研究課題名（英文） Self stigma of people with schizophrenia and family

研究代表者

田中 悟郎（TANAKA GORO）

長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科・教授

研究者番号：00253691

研究成果の概要（和文）：

統合失調症を有する人がセルフスティグマを克服する過程、即ちグループミーティングの中で見られたメンバー間の特徴的なコミュニケーションを明確にした。総合病院精神科外来に通院中の精神障害者を対象にセルフスティグマを克服できるような自助グループを育成する目的で週1回90分のミーティングを130回開催した。参加者は44名で、統合失調症48%、感情障害13%、広汎性発達障害7%、その他32%であった。一回の平均参加者数は5名であった。ミーティングの主なテーマは、日常生活で困っていることや対処法44%、病気や薬に関すること17%、仕事14%、家族関係7%、その他18%であった。次にミーティングを重ねるうちにメンバー間に特徴的なコミュニケーション、即ちレフレーミング（reframing）やユーモアが自然に頻繁に観察されるようになっていった。リフレーミングとは物事の捉え方（認知）の枠組みを変えることである。ある状況をこれまでとは異なった側面から見直すことによって否定的な意味づけを肯定的な意味づけへと変化させる。意味が変わるとその人の反応や行動も変わる。自分の体験を語り他メンバーの体験を聴く場を作ることの重要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The objective of the present study is to clarify characteristic communication techniques among members within the process of forming a self-help group for patients with mental disorders. In order to form a self-help group for patients with mental disorders who were being treated on an outpatient basis at the psychiatry clinic of a general hospital, a total of 130 weekly meetings, 90 minutes in duration, were held. Forty-four patients participated in the meetings, and the breakdown of mental disorders was as follows: schizophrenia, 48%; mood disorders, 13%; pervasive development disorders, 7%; and others, 32%. The average number of participants per meeting was five. Major topics of meetings were: troubles in activities of daily living and measures, 44%; disorders and drugs, 17%; work, 14%; family relations, 7%; and others, 18%. As more meetings were held, characteristic communication techniques, such as reframing and humor, appeared naturally and frequently. Reframing refers to a change in the framing of perception of matters. For example, looking at a certain situation from another angle can modify a negative perception into a positive perception. Changing meanings alters the person's reactions and behaviors. The results suggest the importance of creating an environment for patients with mental disorders to talk about their experiences and to listen to the experiences of others.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：人間医工学・リハビリテーション科学・福祉工学

キーワード：統合失調症 セルフスティグマ

1. 研究開始当初の背景

精神障害リハビリテーションを推進していく上で、精神疾患・障害に対するスティグマ（偏見）の克服は重要な課題である（USDHHS, 1999; WHO, 2001; WPA, 2002）。近年、世界保健機関及び世界精神医学会は世界的に反スティグマ活動をすすめている（Sartorius et al, 2005）。これは、精神障害者を地域で支えていく上での大きな阻害要因として、地域住民の精神疾患・障害へのスティグマ（「パブリックスティグマ (Public Stigma; Corrigan et al, 2002)」）による当事者の社会参加の制約があるからである。このパブリックスティグマは、社会参加を困難にするばかりでなく、当事者及び家族に「セルフスティグマ (Self-Stigma; Corrigan et al, 2002) ; 内なる偏見 (厚生労働省, 2004)」を生じさせ、発病後あるいは再発後の精神科受診を遅らせ症状を悪化させる原因となっているとも考えられる。従って、パブリックスティグマ及びセルフスティグマの両者を低減することができれば、受診行動なども容易になり、その結果医療による治療効果もさらにあがることが期待できる。これまでにわれわれは、地域住民のスティグマ低減プログラムの包括的な評価研究を行い、スティグマ低減には、正しい知識の普及及び当事者との質の良いふれあい体験を積むことが重要であることなどを明確にし、効果的なプログラム立案・実践に寄与することができた（Tanaka, 2003; Tanaka et al, 2003; Tanaka et al, 2004; Tanaka et al, 2005; 田中, 2006）。また、家族の介護負担感を低減するための戦略の一つとして家族自身の対処技能の質の向上及びセルフヘルプグループ（家族会）への参加などが重要であることを報告した（Tanaka et al, 2007; Tanaka et al, 2008; Hanzawa et al, 2008）。さらに、当事者が仲間と語り合えるようなセルフヘルプグループなどへの参加がセルフスティグマ克服には効果的なことも報告した（田中, 2008）。しかしながら、当事者のセルフスティグマと家族のセルフスティグマとの関連性の解明及びそれに基づいたより効果的な当事者及び当事者家族のセルフスティグマ克服プログラムを開発することが今後の課題として残っている。

当事者自身が抱えているスティグマ（セルフスティグマ）は、自尊感情、治療遵守、回復（リカバリー）、QOLなどに影響を及ぼしていることが報告されている（Raguram et

al, 1996; Wahl, 1999; Wright et al, 2000; Sirey et al, 2001a & 2001b; Perlick, 2001; Perlick et al, 2001; Link et al, 2001; Corrigan et al, 2002; Dickerson et al, 2002; Link et al, 2004; Lee et al, 2005; Magana et al, 2007; King et al, 2007; Smith et al, 2008; Lysaker et al, 2008)。また、Kleinman (1988) は、差別される病とスティグマのために周囲の人々から避けられ拒絶された体験を持ち、アイデンティティが傷ついた人々は、周囲の人々の拒絶反応が起こる前から拒絶や差別を予期し孤立するようになると指摘している。差別されるのではないかとという不安や恐れとしてスティグマは内面化され、セルフスティグマになっていくと考えられる。われわれの研究（古川ら, 2004; 田中ら, 2005）においても、入院患者群（124名）と比較して外来患者群（64名）のセルフスティグマ（Consumer Experiences of Stigma Questionnaire; Wahl, 1999）の程度は高い、外来患者群のセルフスティグマは全般健康度（GHQ12; Goldberg, 1972）及び日常生活行動に対する自信の程度（自己効力感尺度; 大川ら, 2001）と関連する、外来患者群においてセルフスティグマは孤立化という自主規制行動を引き起こす、などが示唆された。従って、孤立化を最小限に留めるようなスティグマ対処技能の向上を目指したプログラム開発が求められている。しかし、本邦ではセルフスティグマをテーマにした研究はほとんどみられず、今後の研究の大きな課題になっている（下津ら, 2005）。

2. 研究の目的

本研究は、統合失調症を有する人（当事者）のセルフスティグマと統合失調症を有する人の家族のセルフスティグマとの関連性を多変量解析し、より効果的な当事者及び家族のセルフスティグマ克服プログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

精神科外来通院中の統合失調症（DSM-IV）を有する人とその家族を対象にする。統合失調症を有する人は、対象者の基本的属性、セルフスティグマ（The Internalized Stigma of Mental Illness Scale: ISMIS; Ritsher et al, 2003 & 2004）、知覚された家族からの批判（Patient Perceptions of Criticism: PPC; Weisman et al, 2006）、精神症状（Positive and Negative Syndrome Scale: PANSS; Key et

al, 1991)、行動 (Rehabilitation Evaluation Hall and Baker; REHAB: Baler & Hall, 1983)、QOL (WHOQOL-26, WHO, 1996)、自尊感情 (Self-esteem Scale, Rosenberg, 1979)、希望 (Beck Hopelessness Scale, Beck et al, 1974)、対処行動 (Consumer Coping Questionnaire)、サポート資源 (Social Support Network Questionnaire) などを評価する。家族は、対象者の基本的属性、セルフスティグマ (The Internalized Stigma of Mental Illness Scale: ISMIS; Ritsher et al, 2003 & 2004)、感情表出 (Expressed Emotion: EE) (Five Minute Speech Sample: FMSS; Magana et al, 1986)、全般的健康 (General Health Questionnaire-12items: GHQ12; Goldberg, 1972)、QOL (WHOQOL-26, WHO, 1996)、自尊感情 (Self-esteem Scale, Rosenberg, 1979)、希望 (Beck Hopelessness Scale, Beck et al, 1974)、対処行動 (Consumer Coping Questionnaire)、サポート資源 (Social Support Network Questionnaire) などを評価する。当事者及び家族の評価時点は、研究開始時、1年経過後、1年半経過後の計3回である。

4. 研究成果

①精神障害者の自助グループを育成し、支援していくことは地域精神保健福祉活動を推進していく上で必須のものである。本研究の目的は、精神障害者の自助グループを育成する過程でグループミーティングの中で見られたメンバー間の特徴的なコミュニケーションを明確にすることである。総合病院精神科外来に通院中の精神障害者を対象に自助グループを育成する目的で週1回90分のミーティングを130回開催した。ミーティング参加者は44名で、統合失調症48%、感情障害13%、広汎性発達障害7%、その他32%であった。一回の平均参加者数は5名であった。ミーティングの主なテーマは、日常生活で困っていることや対処法44%、病気や薬に関すること17%、仕事14%、家族関係7%、その他18%であった。次にミーティングを重ねるうちにメンバー間に特徴的なコミュニケーション、即ちレフレーミングやユーモアが自然に頻繁に観察されるようになっていった。レフレーミングとは物事の捉え方 (認知) の枠組みを変えることである。ある状況をこれまでとは異なった側面から見直すことによって否定的な意味づけを肯定的な意味づけへと変化させる。意味が変わるとその人の反応や行動も変わる。自分の体験を語り他メンバーの体験を聴く場を作ることの重要性が示唆された。

②欧米諸国では地域基盤の精神保健サービスへの移行に伴い統合失調症を抱える患者の家族の介護負担感について研究が盛んに

なされてきた。しかしながら日本や韓国といった社会文化的背景を持つ家族については何ら検討されてなかった。そこで北東アジア地域の家族の介護経験に影響を及ぼす社会文化的要因の共通点と相違点を明らかにするために、統合失調症を抱える患者の家族の介護負担感と対処行動について日韓で比較を行った。統合失調症を抱える患者の家族、日本 (長崎) 99人と韓国 (ソウル、テグ) 92人を対象に介護負担感、対処行動、介護役割意識 (東京都老人総合研究所版) を評価した。患者の平均年齢は日本38.5歳、韓国35.8歳、性別は両国ともに男性が7割であった。家族の平均年齢は日本65歳、韓国59.7歳で続柄では母親が日本71.7%、韓国58.7%であった。介護負担感と対処行動は両国間で有意差は認められなかった。しかし、介護役割意識は韓国より日本が有意に高かった。両国ともに介護負担感、患者の社会的機能や介護ニーズとの間および社会的関心の乏しさ、威圧、回避、あきらめといった対処行動や介護役割意識との間に有意な関連が認められた。統合失調症を抱える家族の介護役割意識は日韓両国で相違が見られたが、介護負担感に影響を及ぼす要因は類似の傾向が示唆された。日韓両国ともに家族の介護負担感を軽減するための効果的な支援を検討する必要がある。

③長期入院統合失調症患者64名を対象に退院困難度と関連要因を検討した。退院困難度と有意な相関が認められた評価項目は、作業療法参加回数、GAF、BPRS、LASMIなどであった。対象者のセルフスティグマは、LASMIと有意な関連性が認められた。退院困難度は生活障害と精神症状に関連し、退院困難要因としては病識と薬物療法の必要性の自覚、日常生活能力、家族関係などが明確になった。退院支援には疾病や服薬に関する心理教育、作業療法による生活障害の改善、家族心理教育などが重要であることが示唆された。

④精神科看護師215名を対象に慢性統合失調症仮想事例に対する地域生活困難度の評価を行い、看護師自身のセルフスティグマとの関連性を検討した。因子分析の結果、地域生活困難度は、「入院指向」、「地域生活のための人的資源」、「地域生活上の社会的不利益」の3因子が抽出された。セルフスティグマは「入院指向」と有意な相関が認められた。重回帰分析の結果、「入院指向」と「地域生活上の社会的不利益」との間に有意な関連性が認められた。精神科看護師は統合失調症を有する人の地域生活に対して悲観的な見方を示す傾向が強いため、暴力のリスクに関連づけられた「入院指向」の認識を改善し、多職種ケアマネジメントによる生活支援技術を習得するプログラムの必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 半澤節子、田中悟郎、稲富宏之、太田保之：統合失調症患者の母親の介護負担感に関連する要因 患者の性別による比較。精神障害とリハビリテーション、査読有、13、2009、79-87.
- ② Hanzawa S, Bae JK, Tanaka H, Tanaka G, Bae YJ, Goto M, Inadomi H, Ohta Y, Nakane H, Nakane Y: Family stigma and care burden of schizophrenia patients: Comparison between Japan and Korea. Asia-Pacific Psychiatry, 査読有, 1, 2009, 120-129.
- ③ Hanzawa S, Bae JK, Tanaka H, Bae YJ, Tanaka G, Inadomi H, Nakane Y, Ohta Y: Caregiver burden and coping strategies for patients with schizophrenia; Comparison between Japan and Korea. Psychiatry and Clinical Neurosciences, 査読有, 64, 2010, 377-386.
- ④ Hanzawa S, Bae JK, Tanaka H, Tanaka G, Bae YJ, Goto M, Inadomi H, Nakane H, Ohta Y, Nakane Y: Personal stigma and coping strategies in families of patients with schizophrenia; Comparison between Japan and Korea. Asia-Pacific Psychiatry, 査読有, 2, 2010, 105-113.
- ⑤ Hanzawa S, Nosaki A, Yatabe K, Nagai Y, Tanaka G, Nakane H, Nakane Y: Study of understanding the internalized stigma of schizophrenia in psychiatric nurses in Japan. Psychiatry and Clinical Neurosciences, 査読有, 66, 2012, 113-120.

[学会発表] (計6件)

- ① Hanzawa S, Tanaka G, Inadomi H, Goto M, Tanaka H, Bae JK, Bae YJ, Nakane H, Ohta Y, Nakane Y: Family stigma and care burden of schizophrenia patients: Comparison between Japan and Korea. X II International Congress of International Federation of Psychiatric Epidemiology, 2009. 4. 16, Austria
- ② 田中悟郎、半澤節子、稲富宏之、太田保之：統合失調症患者と同居している家族の介護負担感と対処行動の1年間追跡研究、第43回日本作業療法学会、2009. 6. 19、郡山市
- ③ Tanaka G, Inadomi H, Ohta Y, Nakane H:

Characteristic communication techniques for patients with mental disorders at self-help group meetings, 15th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, 2010. 5. 5, Chile

- ④ Tanaka K, Iso N, Sano M, Ohta Y, Tanaka G: Factors affecting the expressed emotion of geriatric health services facility employees toward dementia patients, 15th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, 2010. 5. 5, Chile
- ⑤ 入江善充、北野紀一郎、田中悟郎：離島でのピアサポートグループ活動の実践、SST普及協会第16回学術集会、2011. 12. 3、長崎市
- ⑥ 田中和貴、石田真由、前田春菜、富永礼子、岡野寿徳、野添雄二、片岡恵美子、浜田芳人、丹羽初子、田中悟郎：統合失調症患者を対象とした長期入院に関する要因についての検討、第31回日本社会精神医学会、2012. 3. 15、東京

[図書] (計0件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 悟郎 (TANAKA GORO)
長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科・教授
研究者番号：00253691

(2) 研究分担者

太田 保之 (OHTA YASUYUKI)
西九州大学・リハビリテーション学部・特命教授
研究者番号：50108304

稲富 宏之 (INADOMI HIROYUKI)
兵庫医療大学・リハビリテーション学部・准教授
研究者番号：10295107

(3) 連携研究者

なし